



「チルドレン」

伊坂 幸太郎著

こんな人が周りにいたら、すぐくメイワク。だけど、おもしろくて目が離せない。この物語に登場する「陣内」は、まさにそんな人物です。家裁の調査官という堅いイメージからはほど遠い、所謂「世間の常識」からはかけ離れた言動には、ニンマリと笑ってしまいました。破天荒で奇抜な言動の「陣内」ですが、その行動には先入観や偏見がなく、思ったことを思ったままに行動する自然体のキャラクターは、とても魅力的。笑いながらも、こうありたいものだ」としみじみ思いました。「え？どうして？」「おかしいやん」と思うことを「陣内」は「それはおかしい！」と大声で主張する。よく考えたら（考えなくても）当たり前のことなのに、それができないおかしさ。当たり前のことができる痛快さ。以前『読書は疑似体験の場だ』と教えてもらった通り、小説を読むことで「陣内」の言動を疑似体験しているから、感じたことをそのままに行動する「痛快さ」を感じることができんだろっ。

そして言葉遣いは違うけれど、私もよく言われる言葉。「大人が格好良かったら、子供はぐれねえんだよ」。これは本当にその通りだと思う。お手本になるべき人が格好良かったら、子供はぐれようがない。子供だけじゃない。大人だって、きっとそうだと思う。大人がちゃんと「大人」であること。今、自分の生き方は人に見せることはできない。だから、「近いうちに格好良い大人になる」と呪文のように唱える毎日です。



Y
M

講談社文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞